

## 世界の幼児音楽教育の動向

— ISME 世界大会と幼児部会セミナー 1992/1994 をとおして —

尾 見 敦 子

### The World Trend of Research and Practice in Early Childhood Music Education: Overview of the ISME World Conference & the ISME Early Childhood Music Education Seminar in 1992/1994

Atsuko OMI

Key Words: music education, early childhood, ISME

#### はじめに

幼児に音楽を教えるという仕事は、適切な環境のもとで、すべての子どもに、適切な音楽を与えたいという強い願いと、幼児の人間発達の過程において、音楽が重要な役割を果たしているという信念と、子どもの日々の生活に幸福な感情をもたらすような音楽の絶えざる探究を要請する、専門的で創造的な職業であると思う。

ISME 世界大会と ISME 幼児音楽教育部会セミナー(後述)——隔年に開かれる音楽教育の国際会議に、1992年、1994年に出席し、幼児の音楽教育の専門性と創造性について大いに啓発されるものがあった。と同時に、音楽教育の今日的論点にふれ、世界の動向の中で広く日本の音楽教育のあり方が問われていると感じた。国際会議は自国と自分自身を照らした鏡であり、それぞれのアイデンティティーを問いなおすよい機会となった。そこで以下本論では、これらの音楽教育の国際会議を概観し、現代社会における音楽教育全体の課題や幼児部会における研究・実践の動向を探りたい。それは幼児の音楽教育の基本原則を確認し、音楽教育全体の中で幼児の音楽教育の位置づけや固有の役割等について考察することとなる。これらをとおして日本の幼児の音楽教育の今後の課題がおのずと明らかになると思う。

## I. 世界の音楽教育の動向— ISME 世界大会 1992/1994 をととして—

### 1. ISME と専門部会

国際音楽教育協会(International Society for Music Education, 略称 ISME)(以下, ISME と記す)は, 国際連合教育科学文化機関(ユネスコ)の傘下にある, 音楽教育に関する最大の国際的組織である。音楽教育のさまざまな領域を包括し, 現在, 次の7つの専門部会がある。

- ①基礎研究 ②音楽の専門家養成 ③学校音楽と教員養成 ④音楽の特殊教育・音楽療法・音楽医学 ⑤地域の音楽活動 ⑥文化, 教育, マス・メディアの音楽 ⑦幼児の音楽教育

ISME 世界大会(World Conference of the ISME)と各専門部会ごとの研究発表会(ISME Commission Seminar)(以下, セミナーと略す)は, 偶数年の夏に開催される。7つの専門部会の主催するセミナーは, 世界大会の開催地の近くでそれぞれ, 約1週間の日程で開かれる。

1992年は, 第5回幼児音楽教育の専門部会セミナーが7月21-24日, 東京都立川市の国立音楽大学において, 第20回世界大会は7月26日から8月1日まで, 韓国ソウルにおいて開かれた。1994年は, 第6回幼児音楽教育の専門部会セミナーが7月11-15日, アメリカ合衆国のミズーリ州, ミズーリ・コロンビア大学において, 第21回世界大会が, 7月18-23日, フロリダ州タンパ市において開かれた。

研究発表と討論を目的とするセミナーは, 活発な討論を可能にするために, 参加者を少人数にしほり, 全日程参加が義務づけられる。これに続く世界大会は全専門部会が集合し, 基調講演, 論文発表, ワークショップ, レクチャー・コンサート, 書籍・楽譜・楽器等の展示・販売が同時に進行し, 夜は複数会場で連日コンサートが開かれる, 約1週間の大規模な国際会議である。

### 2. ISME の目的と活動

ISME の目的は, 1994年の世界大会における高萩保治会長の挨拶によって知られよう。「さまざまな国際紛争が不幸にして増大する中で, ISME のすべての会員が『人権と基本的自由のための教育, 国際理解と協力と平和のための教育に関する1974年のユネスコの勧告』の精神に従って, 地球的視野に立った音楽教育の促進に努力していかれますよう希望します。」<sup>(1)</sup>

日本の, しかも教室(保育室)の音楽の範囲だけで音楽教育を考えている限り, 国際理解や平和のための音楽教育という視点をもちにくい。しかし, ISME 世界大会で繰り広げられる音楽

的パフォーマンスの多様さをひとたび目のあたりにすれば、音楽が文化の基底にあることを知り、異文化音楽への共感と理解が国際平和に通じることを、直感し、納得するのである。

わが国では初等教育・幼児教育における音楽教育の重要性の認識が後退し、幼稚園教育においては保育内容としての音楽は姿を消し、音楽教科は再編成に向かっている。しかし、世界の音楽教育の動向はこれとは逆に、幼児のための積極的な音楽学習活動と環境を計画するというパラダイムを共有するに至っている。また音楽学習の生涯化は、学校教育(formal education)における音楽教育の重要性を減ずるものではなく、民族の音楽的伝統の教育、音楽を通じた人間的コミュニケーションや創造性の教育は、現代社会においていっそう重要になってきているのである。

ISMEは、1994年のISME総会において、前文と11項目からなる「世界音楽教育振興宣言」(Declaration of Beliefs for Worldwide Promotion of Music Education)<sup>(2)</sup>を採択した。高萩保治氏(1992～1994年会長)の邦訳<sup>(3)</sup>にもとづき、5項目を紹介したい。

- (1) 音楽教育は「音楽における教育」と「音楽を通しての教育」の両方を含んでいる。
- (2) 音楽教育は生涯にわたっておこなわれるものであり、すべての年齢の人を含むべきである。
- (3) すべての学習者は、どのような発達段階や技能の段階にあっても、効果的な音楽教師によって用意された、包括的・進歩的で調和のとれた音楽教育を受けられるべきである。
- (10) すべての学習者は、自分たちが出会う音楽の歴史的・文化的脈絡を理解でき、音楽やその演奏に適切な批評的判断ができ、音楽を聴き分け分析でき、音楽に関する美的問題を理解する能力を発達させる機会をもつべきである。
- (11) ISMEは世界のすべての音楽の正当性を信じ、個々の音楽にそれを所有する地域社会が与えた価値を尊重するものである。世界中の音楽が豊かで多様であるからこそ、互いに賞賛し合い、国際理解・国際協力・国際平和を向上させるための異文化間の学習の機会となると考える。

「世界音楽教育振興宣言」は、ISMEが音楽や音楽教育の機能や役割を積極的にとらえ、現代の国際社会にさまざまな貢献をしようとしている姿勢を示している。

### 3. ISME 世界大会 1992/1994

ISME 世界大会も専門部会のセミナーもその年のテーマを掲げて開催される。第20回世界大

会(1992年、韓国、ソウル)のテーマは「世界のさまざまな音楽を共有する」(“Sharing Musics of the World”)であった。ISME 会長、ジョン・リッチー氏は、挨拶の中で「相互理解と世界平和のために、私たちが互いに混じり合うことを望んでいます」と述べた。大会期間中、夕方、3日間にわたって韓国国立劇場の中庭で行われた、韓国の踊りと音楽を学習する特別のセッションは印象的であった。チャンゴやゴングの鳴り響く中、広場いっぱいには散らばった現地の踊り手たちの見よう見まねで、各国の参加者が文字通り「混じり合って」、農民のおおらかで激しい踊りに挑戦した。初めての韓国の音楽舞踊はむずかしく、形にならない可笑しさがまた楽しかった。独特な楽器の音色やまさに踊りを鼓舞するような打楽器のリズムがもたらす聴覚的印象と衣装や小道具等の視覚的印象とが相まって、強烈な異文化体験だった。実際に踊ることで、韓国の音楽舞踊を、それを自文化とする人たちと、異文化とする人たちが「共有」し、また、それを異文化とする外国人どうしが「共有」したのである。

各国の参加者による、この「共有」体験は、「習得」からかけ離れているにせよ、他国の音楽文化を「共有」しようとする積極的な態度において、まさに大会のテーマを具現化するものだったと思う。1992年の世界大会のテーマ「世界のさまざまな音楽の共有」の意味するところは、先入観を捨てて、まずはその音楽を体験すること——つまり、音楽教育実践における「開かれた音楽観」と「真正な(authentic)音楽の体験」の重要性・必要性の主張であったのである。

第21回世界大会(1994年、U. S. A. フロリダ州タンパ)のテーマは「音楽における伝統と変化——その結びつき」(“Musical Connections: Tradition and Change”)であった。ソウル大会では、大会テーマは開会式における基調講演(民族音楽学者、ブルーノ・ネトル氏)と上記の主催国の特別セッション、およびさまざまなワークショップにおいて具現化されていたが、論文発表は大会テーマとは相対的に独立して行われた。タンパ大会では、論文発表にも大会テーマが反映されるように改善された。一般テーマの下に、新たに“Focus Topic”と名づけられた、一般テーマに迫る8つの論題が設定され、これらのテーマに沿った論文が募集されたのである。以下に訳出する。(カッコ内は発表論文の件数)

- ①世界の伝統音楽への脅威(12件)
- ②異文化の音楽の真正なる体験(12件)
- ③様々な文化に固有な音楽を教える(14件)
- ④子どもの音楽創作、その過程と産出物(9件)
- ⑤即興、そのさまざまな様相(9件)
- ⑥子どもにとっての音楽の機能(12件)
- ⑦音楽の伝統を継承する手段としての家庭の音楽活動(6件)
- ⑧地域と音楽教育・芸術教育・一般教育に携わる者との協力関係を増大するための構造的な機構(12件)

ISME 会長、高萩保治氏は、大会プログラムの挨拶の中で、「会議における学術性と芸術性

の融合を高めるために、ホスト国の国内諮問委員会が組織され、熟考を重ねた結果、8つの論題が設定された」と述べている。<sup>(4)</sup>

8つの論題は、音楽教育の根本的・今日的な重要課題を網羅していると言える。そしてこの8つの論題のほとんどが実はそのまま、幼児の音楽教育において検討すべき重要課題であるということに気づかされるのである。演奏と論文発表が同時進行し、かつ論文発表総件数が167件(8つの論題に関する論文=86件、7つの専門部会=43件、基礎研究専門部会のポスターセッション=38件)に上る中で、8つの論題と幼児の音楽教育との接点だけを追いかけることはできなかった。この観点の総括は稿を改めて行いたいと思う。

さて、世界大会はまさに「音楽浴」の場である。児童・生徒・学生・アマチュア・プロによる、さまざまな民族の民俗音楽、芸術音楽をたくさん、むろんライブで、鑑賞することができた。ワークショップは、直接体験による、より積極的な異文化体験の場であった。レクチャー・コンサートは1994年に新しく導入された、解説付きの演奏会である。音響構造、歌詞、楽器の説明にとどまらず、それらの意味、その社会的文化的脈絡が解説され、音楽の多面的な理解を促すという点で、非常に意義深い試みであったと思う。つまり、音楽は決して「世界の共通語」ではないからである。

タンパ大会には1700名にも上る演奏グループが参加したとのことであるが<sup>(5)</sup>、世界大会のテーマとの関連で印象に残ったパフォーマンスとして、次の3つを挙げたい。アメリカ合衆国ワシントン州のワパト・ミドル・スクールおよびハイ・スクールの6～12学年の生徒たちによる「ワパト・インディアン・クラブ」は、アメリカ先住民文化の伝承をたどり、祖先の歌と踊りと身振り言語(sign language)で構成するパフォーマンスを披露した。1975年に独立し、700語の固有言語があるという新興多民族国家、パプア・ニューギニアのポート・モレスビー・インターナショナル・スクールの生徒たちのグループ“Senemai”は、歴史劇を披露した。“Senemai”は多数民族のモツ語で「先祖たち」を意味するということである。この歴史劇は、西洋的生活様式の支配が増し、習俗が徐々に侵食され、変形された先祖たちへの捧げ物として演じられた。7つの演奏団体が参加したフィンランドは、どれも豊かな音楽・舞踊の伝統を反映させた、強烈な民族的個性を発揮していた。合唱を主体とし、楽器演奏と舞踊をあわせもつ、というパーフォーミング・アーツ本来の姿を示しているのが特徴的で、また、ただ伝統に依存するのではなく、伝統の要素を生かしつつ非常に斬新な表現法を用いた現代作品をレパートリーの大きな柱としていた。

「音楽における伝統と変化——その結びつき」というテーマに真正面に向き合ったパフォーマンスにふれて、彼らの自民族の文化に対する誇りやアイデンティティーをひしひしと感じ

た。他民族の、異文化への理解と共感は、自民族の文化に対する誇りやアイデンティティーに裏打ちされることで、いっそう確かなものになるのではないだろうか。こうした観点から日本の「学校音楽」「保育音楽」の内容をみると、自民族の伝統の継承、異文化の尊重、「伝統」と「変化」、いずれも私たち日本の教師・保育者にとってもっとも重要な問いのひとつであることに気づかされるのである。

## Ⅱ. 幼児の音楽教育の動向—— ISME 幼児部会セミナー 1992/1994 をとおして——

### 1. ISME 幼児音楽教育の専門部会とカタリン・フォライ女史

さて、幼児教育の専門部会(Early Childhood Music Education Commission)(以下、幼児部会と略す)は、音楽教育の対象年齢が最も若く、また、7つの専門部会の中で最も若い専門部会である。幼児部会はカタリン・フォライ女史とキャロル・スコット＝ケスナー女史の主導のもとに1982年に設立された。<sup>(6)</sup>

幼児部会の初代委員長はハンガリーのカタリン・フォライ<sup>(7)</sup>である。フォライはハンガリーの作曲家・民族音楽学者・音楽教育家、ゾルタン・コダーイ(1882-1967)の高弟の一人として知られる。コダーイの音楽教育の哲学を実践に移し、まさにハンガリーの子どものための音楽カリキュラムを発展させた一人である。邦訳書『コダーイシステムとは何か——ハンガリーの音楽教育の理論と実践——(1974年、原著1971年)<sup>(8)</sup>は20年前に出版された。本書にちりばめられたコダーイの音楽教育の哲学は今なお普遍的な価値をもっていると思う。

ISMEの機関誌“International Journal of Music Education”が連載している世界の音楽教育者たちの人物伝の第15回に、フォライの業績と人柄が紹介されている。この記事を担当したのは、ハンガリー音楽協会の事務長で1994年のISME世界大会において理事の一人をつとめたチェフファルヴィと、ISME幼児部会委員長、ウェンディー・シムスである。<sup>(9)</sup>

それによれば、フォライはリスト音楽院で音楽教育と指揮の修士号を取得している。教師としての経験は、1947年の幼稚園(3歳から6歳児)での実践に始まり、40数年にわたる。その後ブダペストにある幼稚園教員の養成大学で教え、また、音楽教育の視学官もつとめた。こうした教師としての経験が、教育学のスペシャリストとして、ハンガリー国立教育研究所の研究者としての仕事に反映している。フォライはハンガリー国内の音楽教育のカリキュラムとプログラムを大きく発展させ、同時に教員養成や現職教育に貢献してきた。そしてさらに、国の内外で組織の責任者としての社会的貢献をしている。ハンガリー音楽協会の会長もつとめた。1988年から1990年までISMEの会長であった。<sup>(10)</sup>

フォライの人物伝は、彼女の仕事ぶりを特徴づける二つの対照的な場でのエピソードで始まっている。一つは、アメリカでの幼児音楽教育者対象の夏のワークショップの場面——丸くなってすわった5歳の子どもたちに、にこにこしながら柔らかい声でいたずら子猫の歌を歌いだす。歌の終わりで猫になってジャンプし、くすくす笑うこどもたちを追いかけたというエピソードである。もう一つは ISME 世界大会の会場——静まり返った大きなコンサートホールに、上品なハンガリー女性が開会の挨拶のために演壇に向かって歩いてくる。世界中から集まった各国のリーダーたちを前に、共に手を携え、世界中のすべての人達のために音楽教育をより良いものにしていきましょう、とその音楽的で魅力的な声で、情熱的に語ったというエピソードである。

さて、ハンガリーの音楽教育のカリキュラムは、世界の音楽教育者たちの注目するところである。フォライはその幼児期のカリキュラムを整備した人である。そのカリキュラム・教材・教授法が、世界中で就学前の幼児の音楽教育の模範になっている。<sup>(11)</sup> ハンガリーの音楽教育の系統は、ビデオ『音楽はみんなのもの—コダーイの音楽教育—』の中にその実際をつぶさに見ることができる。日本語版は現在、幼稚園・保育園(3歳から6歳)から小学校8年(14歳)に至る4巻が出ている。(ハンガリーのオリジナル版は、第5巻：中学校から高等学校(14歳～18歳)への音楽教育、第6巻：音楽大学におけるコダーイの音楽教育理論の適用、が続く。)その教育内容・教授法の音楽的水準の高さと、コダーイの次の言葉がまさに実践に移されていることに驚かされる。

「誕生から就学までに共通する重要な原則

1. すべての民族において、自民族の文化、民族の伝承から出発しなければならないということ。
2. 子ども音楽的活動の第一歩は、うたうこと。
3. 音楽教育は早くはじめなければならない。
4. 真の音楽的教養は万人にとって到達可能であり、取得しうるものでなければならない。音楽文化への道とは、学校の授業をとおして、音楽の読み書きを一般化すること。古今東西の音楽的傑作を万人の宝にし、貧富、階級の差を問わずすべての人の共通な財産にすること」<sup>(12)</sup>

フォライはこのビデオの監修をつとめている一方、第1巻の5～6歳の音楽指導を行っている。このビデオは撮影から20年ほどたっていると推測されるが、フォライは1974年には幼稚園教師のために編まれた、幼児の歌唱指導のテキスト“Ének az Óvodában (幼稚園における歌唱)”を出版している。(前半の理論編が、ISME 幼児部会の委員をつとめた畑玲子氏によって1991年に出された。後半の教材編は、自国のわらべうたを採用するという原則に則り、知念直美氏により、日本のわらべうた教材が編纂されている。<sup>(13)</sup>

本書で、幼児期の音楽教育の理念・カリキュラム・教授法について論じ、330曲の教材曲が、唱歌、遊びを伴う歌、歌、の三種に分けて収録されている。巻末には詳細な分類索引(歌詞・メロディー・遊びの特徴からみた分類)がついている。この書は長年にわたる実践的検討を経てまとめられた。序においてフォライは、同僚の音楽教師、幼稚園の教師、幼児たちに感謝の辞を捧げ、次のように結んでいる。

「終わりに、幼児たちに。彼らはずっと音楽の美しさをよく受け入れ、そして成長と生命の愛によって過去35年間、言いつくし得ぬ喜びを私に与え、支えてくれました。」

フォライは現在も週1回、保育園で幼児の音楽指導を続けている。また昨年(1994年)には乳幼児の音楽教育のテキスト“Ének a bölcsődében(保育園における歌唱)”をハンガリーで出版した。乳幼児の音楽教育の考え方を示し、その教材(遊ばせ歌、わらべうた)255曲が、同じく分類索引を伴って収録されている。フォライが「常に変わらない情熱と推進力」(畑、あとがきより)をもって、現在も仕事を続けていることが知られよう。幼児の生活に質の高い音楽経験が重要であること、そして幼児のための音楽の教授法の研究が尊重され、卓越した位置を占めることを、フォライは世界の音楽教育の学界において主張し、推進し続けてきた。<sup>(14)</sup> ISME 幼児部会の創設から13年、このことはすでに当部会の共通認識となっている。

## 2. ISME 幼児部会の目的と活動

幼児部会は当専門部会の方針を次のように表明している(1990年採択、1992年改訂。さらに1994年セミナーで検討され改訂版が早晚出ると思われる)。<sup>(15)</sup> すなわち、幼児部会の目的は、

1. 幼児の生活における音楽——特別な才能を発達させる音楽ではなく、すべての子どもたちの幸福と発達をもたらすような高い環境を創りだす音楽——を促進させること
2. 音楽と幼児(誕生から8歳までの——この領域の科学的知識が得られれば、誕生以前でも)に関する知識や考え方を交わす、国際的なフォーラムを提供すること
3. 質の高い音楽や、幼児の音楽的発達や音楽に関する質の高い研究が増すように刺激すること
4. さまざまな文化において幼児がいかに文化化(acculturation)されるかを知り、さまざまな文化から見た音楽指導や音楽学習の類似点と相違点を討議すること
5. 将来の子どもの生活における音楽にとって重要な論点——たとえば、マスメディアや科学技術の影響、社会の急激な変化、音楽的発達に果たす家庭の役割、音楽的発達に果たす文化や学校教育の役割、文化的な境界の崩壊という観点に立った文化的伝統の保存——を考



察すること

である。

これらの目的を達成するための主たる活動が、隔年に開催されるセミナーである。セミナーの目的は、「幼児の音楽教育における研究と教育実践に関する最新のアイデアを分かち合い、広めること」(傍点引用者)である。<sup>(16)</sup> 幼児部会委員長、ウェンディー・シムスは機会あるごとに「研究と教育実践が一体となること」を常に主張してきたが、それは創設者フォライの仕事の軌跡そのものであり、また幼児部会を推進してきた人たちの仕事ぶりそのものである。2度のセミナーで出会ったアメリカの大学の研究者たちのほとんどは、ボランティアで定期的に幼児と音楽活動をしていることもわかった。一方、大学等の組織に属さない個人の音楽教育家たちは、自分の実践の哲学・カリキュラムを明快な言葉で語る研究的実践家たちであった。

セミナーへの応募論文は、「次のいずれかに関するものであること」と規定されている。<sup>(17)</sup>

- ①子どもの音楽性に関する研究：その音楽的特徴、音楽的反応、音楽的発達。
- ②子どもの音楽環境に果たす大人の役割に関する研究。
- ③幼児のための音楽教育者の養成に関する研究または実践モデル。
- ④幼児との典型的な教育実践のモデル、又は研究方法。

音楽教育研究が、この4つの領域のいずれも欠くことができないことは言うまでもない。個々の音楽教育者においてこれらの領域は、力点の置きかたに違いはあるものの、関連し合うことはたしかである。幼児部会はより積極的な「研究と教育実践の一体化」をめざし、そこに集う人たちはそれを期待されている。

セミナーは、少人数のいわば合宿のような研究交流会である。2度にわたって研究発表を行う機会を得たが、論文発表者・参加者が同宿し、5日間(1992年は4日間)の全日程(朝9時から夕方、日によっては夜9時まで)に出席し、討論に参加するのが基本条件(研究発表者は絶対条件)になっているだけに、一人一人の顔の見える、親密で、率直、活発なやりとりを享受した。

幼児部会は、セミナーの開催のほか、ニューズレターを年2回発行し、5年ごとに音楽教育者たちの現職教育特別コースを主催するという活動を行っている。その第1回が1993年6月に2週間、ハンガリー、ケチケメート市にあるコダーイ研究所で行われた。

幼児部会は6人の委員(commission members)で運営される。委員の任期は6年で、世界の地区ごとに選出され、2年ごとに2名ずつ入れ代わる。<sup>(18)</sup>

セミナーの開催地は ISME 世界大会の開催地と連動して、世界の各地区を回る。セミナーの開催地はそのまま、幼児部会の委員たちの母国を示しているといつてよいだろう。順に開催地

を追いながら、関わりのあった人々を挙げていこう。

第1回セミナー(1984年):アメリカ合衆国ワシントン州シアトル=部会の設立に関わった, Dr. キャロル・スコット=ケスナー。第2回(1986年):ハンガリーのケチケメート(ゾルタン・コダーイの生誕の地)=カタリン・フォライ, Dr. デイトリッヒ・ヘルガ。第3回(1988年):オーストラリアのブリスベン=オリヴ・マクマーン, 第4回(1990年):フィンランドのラハティ(アン・ピロイーネン)。第5回(1992年):日本=(故)畑玲子。第6回(1994年):アメリカ合衆国ミズーリ州コロンビア=Dr. ウェンディー・シムス。カナダのDr. ネヴァイダ・リース, ドナ・ウッド, ドイツのグッドラン・シュミット・ケルナー, マレーシアのアンジェリン・リーのほか, オランダ(1996年 ISME 世界大会開催国)のマーグレ・ヴァン・ゲステル, 南アフリカ共和国のシーラ・ウッドワード(幼児部会の新委員長)など, セミナー非開催国の委員たちの名も挙げておきたい。

### 3. ISME 幼児部会セミナー 1992/1994

第5回 ISME 幼児部会セミナー(1992年, 東京)のテーマは, 「子どもの音楽世界についての発見を共有する」(“Sharing Discoveries about the Child’s World of Music”)であった。セミナー参加者は, 海外から30名, 国内から70名, 計100名で, 参加国数は18か国だった。第6回セミナー(1994年, U. S. A. ミズーリ州コロンビア)のテーマは, 「幼児と大人と音楽, その力強い結びつき」(“Vital Connections: Young Children, Adults & Music”)であった。セミナー参加者は, 20ヶ国, 56人で, その内訳は, 主催国であるアメリカ合衆国が24人, ヨーロッパ12人, アジア7人, カナダ5人, 中・南アメリカ4人, オセアニア3人, アフリカ(南アフリカ共和国)1人だった。

セミナーの主要プログラムは研究発表である。1992年は12ヶ国より14件, 1994年は11ヶ国より17件であった。論文名を訳出して一覧表にし, 表1に示した。先にふれた, セミナーへの応募論文の4領域に照らすと, 「①子どもの音楽性に関する研究」と「④幼児との典型的な教育実践のモデル, 又は研究方法」が約3分の1ずつ, 「②子どもの音楽環境に果たす大人の役割に関する研究」と「③幼児のための音楽教育者の養成に関する研究または実践モデル」を合わせて約3分の1である。

1992年・1994年の両セミナーを組織したシムス委員長は「当専門部会のセミナーの論文は, 最も高いレベルの研究(research)と教授法的方法論(pedagogical methodology)を示す, 学術論文であるべきだ」と述べている。そして, 「すべての幼児のための質の高い音楽経験を提

表1 I. S. M. E. 幼児部会セミナーにおける研究発表 (題目一覧)

1992年 (第5回セミナー)	Olive McMahn	オーストラリア
① 問題解決を行いつつ指導すること	Fiona Stuart	イギリス
② 幼児の音楽教育における両親のかかわり	Gudrun Schmidt-Kaerner	ドイツ
③ 初等音楽教育において両親は積極的参加者か消極的参加者か	尾見敦子	日本
④ 幼児の自発的歌唱行動	Mary Lou Van Rysselberghe	U. S. A.
⑤ 多文化モデルとしての幼児音楽教育者たち	Mate Vikat	エストニア
⑥ エストニアの就学前音楽カリキュラムにおける民謡の役割	Lily Chen	香港
⑦ 香港の幼児の歌の習得過程：メロディーと歌詞の関係	安達真由美	日本/U. S. A.
⑧ 指導による幼児の読譜力の発達	Diane Cummings Persellin	U. S. A.
⑨ 5歳児のリズム感覚の発達における学習様式の効果	Anna-Lena Noren-Eriksson	スウェーデン
⑩ 特殊教育の方法としての音楽	Sheila C. Woodward	南アフリカ共和国
⑪ 胎児や新生児の音楽世界	Kirsten Kjaer	デンマーク
⑫ 6ヵ月から3歳までの幼児の音楽的刺激にもとづく発達のプログラム	Marijke Arbers & Magre Van Gestel	オランダ
⑬ 「ひざの上の音楽」：幼児音楽教育者の養成	Tali Turel	イスラエル
⑭ 誕生から3歳までの幼児の音楽指導者のための特別の企画		
1994年 (第6回セミナー)	Katharine Smithrim	カナダ
① 就学前児のテレビ視聴時における音楽的反応	Magre Van Gestel	オランダ
② 幼児の全体的な発達により良い音楽的活動に参加するための観察学習	尾見敦子	日本
③ 幼稚園教諭養成における音楽専攻学生のためのクラス授業；子どもとともに音楽を楽しむ積極的な態度を育てるために	Mary Stouffer	カナダ
④ 音楽遊びによる感情の発達	Olive McMahn	オーストラリア
⑤ 行動的研究法	Susan M. Tarnowski	U. S. A.
⑥ 就学前児の音楽的な遊びと教師・子ども間の相互作用の効果	Josette Silveria Mello Feres	ブラジル
⑦ 母子関係を仲立ちさせるものとしての音楽	Kenneth K. Guilmartin & Lili Levinowitz	U. S. A.
⑧ 幼児の音楽クラスへの両親の適切な参加によって音楽的な発達を高めるためのモデル	Carol Scott-Kassner	U. S. A.
⑨ 幼児期の音楽：大人の参加と相互作用の効果的モデルを求めて	Maria Seeliger	ドイツ
⑩ ハイデルベルグ・マンハイム音楽大学における幼児のための音楽教育者の養成	Berit Udden	スウェーデン
⑪ スウェーデンの幼稚園における教育理論と音楽実践の統合をめざして	Lily Chen	香港
⑫ 幼児の歌唱における歌詞とメロディーの音高関係の効果	Peta J. White, Desmond C. Sergeant, & Graham F. Welch	イギリス
⑬ 5歳児の歌唱の発達についてのいくつかの観察	Danette Littleton	U. S. A.
⑭ 異文化間における就学前児の自発的音楽行動	Michelle Hariston & Linda High	U. S. A.
⑮ アパラチアに伝わるジャックの民謡と音楽による即興的音楽劇	June Boyce-Tillman	イギリス
⑯ 子どもにとって自然であることに依拠したカリキュラムの産出	Sheila Woodward	南アフリカ共和国
⑰ 音楽学習の機会という「窓」		

供していくためには、研究と教授学の双方が連携(hand in hand)しなければならない」と言う。<sup>(19)</sup> この認識は重要であると思う。音楽教育学は実践の学であり、個々の教師がそれぞれ、より良い自分の実践を生み出す過程に寄与するものでなければならない。それゆえに、「すべての幼児のための質の高い音楽経験を提供」するための、「最も高いレベルの研究と教授法的な方法論」をそなえている「学術論文」が要求され、それらを「分かち合い、広めること」(セミナーの目的、前述)がめざされるのである。

今、実践家と研究者を、「学習者(幼児・学生にかかわらず)に音楽経験を提供する」ということにおいて直接的か、間接的か、あるいは日常的か否か、という観点から区分して用いると、<実践家>の発表は、研究と教授学を自覚的に援用しようとしていた(表1. 1992年⑫⑬⑭, 1994年③⑧⑩)。一方<研究者>の発表も、研究の結果が、より適切なカリキュラムのモデルや指導法の開発にどう生かされるかを視野に入れていたと思う(1992年⑦⑨, 1992年⑥⑫⑯)。実際<研究者>のほとんどが教員養成にかかわる大学に所属し、学生に対する直接的・日常的教育実践を行っている<実践家>であった。しかもその多くが定期的に子どもに教える機会をもっているということであった。自身がそうした'researcher/teacher'であるシムス委員長にとって、セミナーで共有しようとする論文についての上記のコメントはもっともであると言える。

音楽教育についての研究は、書かれた言葉(論文)によってだけでは伝えられないものが残る。先ず音楽自体が伝えられない。音楽に係わる情報の内、楽譜に表せるものは非常に限られている。むしろ楽譜に表せないニュアンスの方が重要であることもある。微妙な音程や間、音色、即興演奏、などである。また、音楽に伴う身体の動きを記譜する合理的な方法がない。幼児の音楽教育にとって、身体の動き(movement)は音楽と不可分で重要な側面である。次に、指導自体が伝えられない。音楽指導においては非言語的(non-verbal)な指示が非常に重要である。<sup>(20)</sup> これらの点を補うものとして、口頭発表でビデオが活用されるのはいうまでもない(1994年④はビデオ発表であった)。しかし、ビデオで代替できないものが残る。ライブで聴くこと、つまりその音響空間に身を置くことで感得するものが大きいのである。以上のことは音楽教育研究の伝達・共有にとって、大変大きな問題であるつつねづね考えていただけに、1994年のセミナーがワークショップによる発表を2件含んでいたことは、意味深く思われた。

ドイツのゼーリガーの発表「ハイデルベルグ・マンハイム音楽大学における幼児のための音楽教育者の養成」(1994年⑩)は大変印象的だった。発表時間30分、質疑応答時間15分、計45分のほとんどが、ワークショップにあてられた。参加者の約半数が、いわば彼女の学生となって、歌とダンスによる三重のカノン、ムーブメントによる即興的創造表現(大地、水、空

気、火の4部構成)を体験した。他の半数は、このデモンストレーションを鑑賞した。ワークショップにおける被受講体験を通して感得したものは、音楽の超言語的コミュニケーションそのものであった。ゼーグラーの話し方、身のこなし、そして用いられた音楽、すべてが総体として音楽刺激となる。そこで喚起された自然の精霊たちのイメージを、私たちは通い合わせ、感じているものを互いに目と身体で話す。言葉はなく、音楽と身体表現のみである。

ゼーリガーの勤務校のカリキュラムについて、セミナーの論文集に掲載されているので紹介したい。8人のスタッフが1981年以来作り上げてきたという、幼児のための音楽教育者養成課程の履修科目は以下の7科目である。①教授法(週2時間、第8期)②同、演習(週1時間、第6期)③教育実習(週2時間、第8期)④ムーブメントとダンスによる即興的創造表現(週2時間、第4期)⑤初等音楽における楽器による即興(週1時間、第2期)⑥スピーチ・トレーニングとレトリック(週1時間、第3期)⑦ボイス・トレーニング(週1時間、第4期)。スタッフのほぼ全員がかつてオルフ研究所で学んでおり、音楽教授上の原則を共有しているとのことであった。

以下いくつかの発表について、「研究と教授学の連携」という観点から概観したい。アメリカのタルノフスキー(1994年⑥)は、教師対子どもの相互関係が幼児の自発的音楽行動に及ぼす影響について、興味深い研究を発表した。4つの均一なグループに、次の4つのタイプの教授行動をとってある歌を教えた後、自発的音楽遊びの出現を調べる：批評の言葉を加えるけれど遊びに介入しない<観察>タイプ、素材やヒントを示す<反応>タイプ、子どもの注意を引きつけるためなら何でもする<エンタテイナー>タイプ、ある知識や技能を教える目的で子どもに指示し、反応まで支配する<監督>タイプ——すると、この順で、多く出現したということである。

子どもの発達に適切なカリキュラムを作るべきだ、というイギリスのティルマン(1994年⑩)の主張は明快である。3歳～5歳児は、音が出る物自体に働きかけ、その音色に関心を持つ時期であるから、創作領域では楽器の音色を探索する活動がふさわしい。そのために、さまざまな音が出るものを集めた「サウンド・コーナー」を作って、子どもが個人的に、自由に探索できる環境を設定するとよい、というのである。一方、グループで音色探索活動を行うときのアイデアの例を、実際に子どもたちと行った活動のビデオを見せて紹介した。彼女はスワンウィックとともに、「発達の筋道(Sequence of development)」<sup>(21)</sup>と題する35ページにわたる論文をイギリスの主要音楽教育誌に発表し、「子どもの音楽的発達を説明するらせんモデル」<sup>(22)</sup>を提出したことでよく知られる。40人余りの子どもの、9種の創作課題に対する反応を、縦断的に収集し、700を超える創作例を分析し、8つのモードをらせん的に昇っていくモデルを構

築した。こうした労作的研究をもとに、「子どもにとって自然であることに依拠したカリキュラムの産出」(論文のタイトル)を主張しているだけに説得力がある。なお、イギリスは1960年代以降、一般教育としての音楽教育における創作(composition)(たんに旋律創作ではなく)教育の意義が主張され、多くの斬新な実践が紹介され、今日に至っている。この辺の事情が音楽作品の演奏中心の日本の音楽教育と大いに異なっている。ところで彼女は、小・中学校でも長く教え、教科書も出版している。個性的、創造的な人で、セミナーの一夜、大学内の小さな教室で、自作の語りとピアノの弾き歌いの小公演を開いた。中世ドイツの女流作曲家の生涯を題材にした作品で、作曲もさることながら演技力に引き込まれた。依頼があれば小道具と楽譜を詰めた小さなかばんをもってどこでも出掛けて演奏してくる、それが自分の楽しみ、と生き生きと話す彼女は、さしずめ‘musician/researcher/teacher’である。1996年のセミナーは、ティルマンの大学のあるウィンチェスターで開催予定である。

尾見(1992年④)は、習い覚えた歌の再生を除く、自発的な、声を用いて音響を組織立てる行動(sound-organizing behavior with voiced sounds)のカテゴリーを示し、実践への示唆として、大人の共感的受容の大切さを述べた。歌の産出の過程とそこで用いられる音楽的方略(musical devices)を説明するモデルを後に明らかにした。<sup>(23)</sup>

“No effect, but affect!”「教育の結果を求めるのではなく、教育の各過程が音楽によって情緒的に満たされることが大切なのです。」

『『ひざの上の音楽』——幼児音楽教育者の養成——』(1992年⑬)の結びの言葉の簡潔さ、的確さに大きな拍手が湧いた。オランダのアルバーズらは4か月から48か月までの子どもをもつ両親のための「ひざの上の音楽」コースを1988年に開始した。乳児期から音楽を教えて正しい音感やリズム感を養うというのではなく、情緒的・運動的・感覚的・社会的・知的発達に適切な音楽の諸側面をたしかに活用することで、その後の一般的発達と音楽的発達に積極的・建設的な影響を与えることを目的とするものである。このプログラムの内容を紹介するビデオテープの副題に「音楽とともに成長する」とある。そして「ひざの上の音楽」は「音楽以上のものである」と解説パンフレットにうたわれている。つまり、「親子で音楽をいっしょにすることできづなが高まる/歌うことは言語発達を刺激する/動くことや踊ることで運動技能やリズム的技能が発達する/音楽を創ることで感情的・知的発達が促される/音楽は集中する・聴く能力を鋭敏にする」のである。<sup>(24)</sup> 子どもを完全な一人の人間として尊重し、接することの重要性が強調され、子どもとの接近する距離や、子どもを抱く姿勢について具体的に解説される。親密なゾーン(ひじの長さの距離)、個人的なゾーン(50-75 cmの距離)、社会的なゾーン(75 cm-2 mの距離)、公共的なゾーン(2 m以上の距離)に区分し、意識的に調節すること。

## 世界の幼児音楽教育の動向

表2 音楽活動のカテゴリーと活動例

1. 音を探索する
  - 1-1 台所で見つけた音で音楽作り
  - 1-2 ワイングラスのグラス・ハーモニカ
  - 1-3 牛乳パックで作るリコーダー
2. 身体楽器、特に声を用いた創作・即興
  - 2-1 声のハーモニー：「人間オルガン」で歌の伴奏
  - 2-2 リズム・オスティナート：手足拍子と声を使って
  - 2-3 無音程打楽器を声で模写する
3. 日本語の音の響き・リズム・抑揚：言葉から音楽へ
  - 3-1 言葉の音色・意味を音楽的にふくらます
  - 3-2 韻律詩を打楽器に加えて唱える
  - 3-3 韻律詩をもとにしたサウンド・コンポジション
  - 3-4 オノマトペの音楽
  - 3-5 お囃子の口唱歌を唱える・和太鼓の音を声でシュミレーションする
4. 音楽と言葉・動きが結びつく世界
  - 4-1 なぞなぞうたを作る
  - 4-2 お話に音を加える
  - 4-3 絵かき歌を作る
  - 4-4 身体の動きのための音楽を作る
  - 4-5 音と動き、音と視覚の融合
5. ルールを設定した即興的創作
  - 5-1 音響を組織化するルール：音楽の諸要素を知る
  - 5-2 声高に読み替える：「名前・電話番号の音楽」
  - 5-3 環境音を音楽として聴く・再構成する
  - 5-4 子どもの発話を素材として：「おなかすいた」・「お母さん」
6. 自国の音楽を体験する
  - 6-1 日本のわらべうた遊び
  - 6-2 日本の民族音楽：和太鼓やお囃子の音楽
7. 授業のルーティーンを音楽で味付けする
  - 7-1 授業のオープニングソング、エンディングソング
  - 7-2 わらべうた風・洋風の出席とりの音楽
  - 7-3 ビートにのってプリントを配る・小物楽器を回す
  - 7-4 ラップ風にレポートを集める

また、抱かれた姿勢の安定がもたらす効果を知り、体の中心を支えるように抱くこと、自分と抱いた子どもが一体となって円を描くイメージを保つこと等である。

尾見(1994年③)は、保育者養成における音楽教育の目標を、幼児の音楽世界に共感し、ともに音楽を創造的に楽しむことができることに設定し、この目標の達成のために、音・音楽・言葉・楽器を素材とした、想像的・創造的な音楽活動を中心としたクラス授業を展開するというのがその趣旨である。音楽の教育内容の範囲と分類を訳出したのが表2である。「音の探索」、「即興的創作」、「言葉から音楽へ」「音楽と言葉・動きの結びつき」は子どもの音楽世界の理解に通じるものとして位置づいている。「自国の音楽の体験」は子どもの発達の道筋に即し、異文化理解の前提でもある自文化理解は不可欠なものであると考える。子どもが即興歌を歌うと

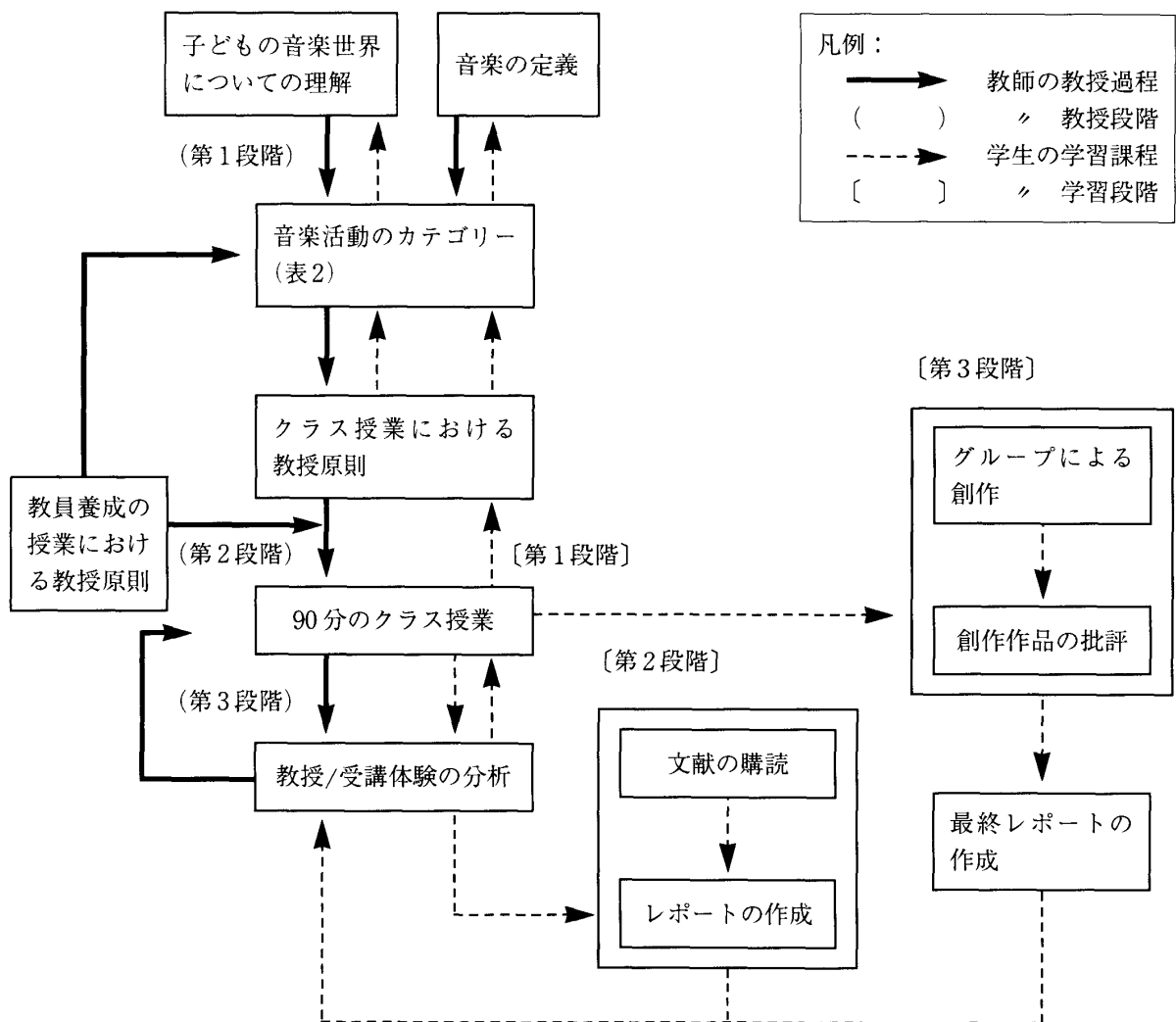


図1 授業の構造



き、まさに「ルーティーン」すなわち、繰り返される日常が、「音楽で味つけ」され、日常から離陸して別のなにか楽しいものになる。それと同じことをまさに「授業のルーティーン」を用いて楽しんでみよう、というものである。教授法の原則は、機械的な練習・冗長な言語的指示・紙の上の音楽理論などの非本質的な教授法を排した、「音楽的」方法を工夫する一方、グループの特性を活用しての、クラス全体による即興的な音楽演奏の共有体験を多くもつことである。また「模倣から創造へ」「具体的な体験から知識の一般化へ」という順序を保つことである。授業間の構造を訳出したのが図1である。自分の学習過程を逆にたどり、教師の教授過程を推測して分析することができることが最終的には目指される。

「子どもの音楽世界」の固有性、「幼児、大人、音楽の強い結びつき」の積極的な追求——セミナーのテーマはそのまま、幼児の音楽教育をとらえるキーワードである。ISME 幼児部会は、幼児のための本来的な音楽カリキュラムの創造というパラダイムを有している。

### Ⅲ. 幼児のための本来的な音楽カリキュラムの創造のために—結びに代えて—

子ども時代は貴重である。無意味でつまらないことに浪費させてはならない。幼児期は学習の準備の時期ではなく活発で積極的な学習の時期なのである。子どもには全体学習に導くような経験が用意されるべきであり、音楽的経験はそれを起こさせるような要因となりうるのである。<sup>(25)</sup>

バーバラ・アンドレス(アリゾナ州立大学音楽学部名誉教授)は『幼児期の音楽経験』(1980年)の結論で力強くこう述べている。

書名自体が一つの主張を成しているこの本の意図を聞こう。

本書は幼児のための音楽経験のプログラムを示すものだが、従来の考え方と異なり、過程に焦点を当てる。結果については必ずしも問うものではない。観念やレパートリーを押しつけるやり方よりむしろ、手で触って、試して、発見するというやり方を具体化している。幼児期の経験というものは、生活の中で音楽を利用したり楽しんだりするやり方を子ども自身が学習し、探索し、選び、判断できるようなパターンを配置しているものであろう。<sup>(26)</sup>

子ども自身の探索をとおした発見を重視すると教師の役割はどのようなのだろうか。アンドレスは言う。

子どもと毎日を過ごす教師は、受け身の傍観者ではなく、教育的変容の芯である。変容を心に描け、勇気をもって新しい方法を試せる力量と、効果を判断できる能力が肝要である。<sup>(27)</sup>

では、教師はどのような場面でどのような役割を果たすのだろうか。それに答えるのが「学習環境の3側面モデル」(図2)である。「学習環境の3側面モデル」は、音楽が子どもの生活の重要な部分となるための包括的なアプローチを提供する。それは(1)浸透性のある学習

(2)特別な「興味」のエリア (3)設定されたグループ遊び である。学習環境とは、探索のための空間・人・物・時間から成る。探究する雰囲気を作り出すことによって、子どもの好奇心をそそるように環境が設定されるべきである。学習環境は、3～4歳児には大いに個人化されていることが必要だが、5歳児にはよりグループ内の相互作用が高まることが望ましい。三角形の各「辺」が全体の枠組みを支え合う関係である。どの「辺」に力点が置かれるかは年齢層に拠るが、どの年齢層においても、各「辺」のいずれもが活用されること。2～3歳児には自由な選択の機会のある特別な「興味」のエリアがふさわしいが、3～4歳児に

は協同的な遊びがより用いられる。学習環境の3側面において教師の役割は異なってくる。すなわち、相互行為者(interactor)としての教師、ファシリテーターとしての教師、指導者としての教師である。<sup>(28)</sup>

ところで「音楽が子どもの生活の重要な部分となる」とはどういうことだろうか。それを説明してくれるのがドナ・ウッズの「子どもは音楽をとおして発達する」という図である(図3)<sup>(29)</sup>。

ウッドはカナダの王立音楽院で幼児のための音楽教育に長らく携わってきた。音楽は太陽とのウッドの比喩は説得的である。ウッドの書名はそのまま、子どもの音楽経験の種類を示している。すなわち、「動く(move)、歌う(sing)、聴く(listen)、楽器を演奏する(play)」である。シムスは「音楽活動と指導のための指針」の中で、音楽経験の種類を次のように分類している。すなわち、「歌唱(singing)、身体の動き(moving)、聴取(listening)、音の探索と楽器の演奏(Exploring sounds and instruments)、創造性の育成(Fostering creativity)」である。<sup>(30)</sup>ウッドが「動く(move)」を筆頭におくのは、彼女がダルクローズのリトミックに実践の根拠を多く負っているからであろう。シムスが「音の探索」と「創造性の育成」を特に含めているのは、幼児期の音楽教育の意義をいっそう広く認めているからであろう。表現の差異は別として、音楽経験の種類として、歌唱、身体の動き、聴取、楽器演奏、の4つは定着しているといえる。身体の動きはごく自然な幼児の音楽経験の仕方であることは明白なのだが、音楽経験の種類としての身体の動き、というとらえかたはあまりなされていないと思われる。歌唱においても楽器演奏においても、声や楽器による音の探索や即興表現を含んだ展開は、楽曲の演奏より原初的で、技術的な制約がないにも係わらず、日常的に親しまれていない。このように、幼児にどのような音楽経験を提供するかという研究と実践の蓄積において、日米の違いは大変大きい。しかし、今後はアンドレスを始めとする幼児期の音楽教育の理論と実践に学びつつ、日本の子どもたちのための音楽カリキュラムの創造という仕事が必要ではないだろうか。終わりに、全米音楽教育者協会(Music Educators National Conference; MENC)の幼児教育に関する見解表明(1991)を要約引用する。<sup>(31)</sup> 大いに示唆を受けるものである。

#### 幼児と、発達と個性に応じた適当な音楽環境についての所信

1. すべての子どもは音楽的な可能性をもっている。
2. 子どもは音楽の学習環境に対してユニークな関心と才能を表す。
3. ごく幼い子どもは音楽的な観念をとおして重要な思考力を発達させることができる。
4. 子どもたちの母国語とその文化は尊重されなければならない。
5. 子どもは範例的な音楽活動や音楽の素材を経験すべきであり、陳腐で質の低いもので貴重な学習の時期を浪費すべきでない。
6. 正確な歌唱・リズム反応・楽器の演奏技能を発達させる機会が得られるべきである。しかし、決められた演奏のレベルを達成させることは本質的でなく、適切でない。
7. 子ども遊びは彼らの仕事である。子どもは遊びの環境の中で学ぶ。音楽コーナーのような個人的な遊びや、歌遊び(singing games)のようなグループで行う音楽遊びの機会を

もつべきである。

8. 子どもは楽しく、身体を使い、仲間と触れ合う環境において最も良く学ぶ。音楽学習の文脈が以下のものを含むとき最も効果的となる。(1)遊び (2)ゲーム (3)会話 (4)絵画的イメージ (5)物語 (6)生活の出来事の反映 (7)社会的な仕事に従事すること。
9. 多様な学習環境が、多くの個々の子どもの発達の必要にかなうように用意されることが必要である。
10. 子どもは効果的な大人の手本を必要とする。

### 注

- (1) 1994年 I. S. M. E. 世界大会プログラム, p. 6.
- (2) "International Journal of Music Education" No. 24, 1994. p. 49.
- (3) 『音楽文化の創造』(音楽教育国民会議, 会報)第15号, 1994. 9月. p. 13.
- (4) 注1に同じ.
- (5) 中嶋恒雄(1994)「1994年度国際音楽教育協会(ISME)タンパ大会報告」『音楽文化の創造』第15号, p. 13.
- (6) Sims, Wendy (1994) "ISME Commission Reports: Early Childhood Music Education" *International Journal of Music Education* No. 22, p. 56.
- (7) ハンガリーの名前は日本語と同様, 姓名の順であるが, 本稿では英語に準ずる表記とする.
- (8) 羽仁協子訳, 音楽之友社. 次の2論文を所収. カタリン・フォライ「私たちの音楽教育の基本原則と就学までのこどもの音楽的発達」, エルジェベート・セーニ「コダーイ・メソードによる音楽教育」
- (9) Csebfalvi, Eva & Sims, Wendy (1992) "Personalities in World Music Education No. 15, -Katalin Forrai" *International Journal of Music Education*. No. 20, p. 35-37.
- (10) ISMEは会長の任期2年の前後に2年間ずつ, いわば副会長をつとめるシステムで, President-Elect, President, Past-Presidentをそれぞれ2年間ずつ, 計6年間の要職にあった.)
- (11) 注9, p. 35.
- (12) 注8, pp. 3-9.
- (13) 『わらべうた・音楽の理論と実践——就学前の音楽教育』1991. 明治図書(英語版からの翻訳)
- (14) 注9, p. 37.
- (15) 注6に同じ.
- (16) "ISME Commission Reports: Early Childhood Music Education" *International Journal of Music Education* (1995)No. 25, p. 81.
- (17) 注16, pp. 81-82.
- (18) 注6に同じ.
- (19) Sims, Wendy (1992) "ISME Commission Reports: Early Childhood Music Education" *International Journal of Music Education* No. 20, p. 56.
- (20) 1994年セミナーでは各国の子供の歌や遊び歌を互いに教わって体験する時間が新設された. 唱歌1曲を除くすべてが五線記譜法で書かれていたが, 同じ楽譜をみて歌っていても, 言葉の発音から来

る音色の違い、しばしば即興的な踊りが付くことによるリズムのゆれは明らかだった。その国の音楽らしさを表現する質を記譜することはきわめて困難なのである。

- (21) Swanwick, Keith and Tillman, June (1986) "The Sequence of Musical Development: A Study of Children's Composition" Vol. 3, No. 3, pp. 305-339.
- (22) 注21, p. 331.
- (23) Omi, Atsuko (1994) "Children's spontaneous singing: Four song types and their musical devices" 『川村学園女子大学研究紀要』第5巻第2号, pp. 61-76.
- (24) The Toddlers and Music Association "Music on the Lap: growing up with music" 'background information about the tape' p. 4.
- (25) Andress, Barbara (1980) "Music Experiences in Early Childhood" Holt, Rimehart and Winston. p. 181
- (26) 注25, p. vii.
- (27) 注25, p. 181.
- (28) Andress, Barbara (1991) "Developmentally Appropriate Music Experiences for Young Children" *Early Childhood Creative Arts* pp. 65-73. National Dance Association.
- (29) Wood, Donna (1982) *Move, Sing, Listen, Play: Preparing the young child for music* Gordon V. Thompson Limited, Toronto, Canada. p. 26.
- (30) Sims, Wendy (1993) "Guidelines for Music Activities and Instruction" *Music in Prekindergarten: Planning & Teaching*. pp. 19-17. Music Educators National Conference.
- (31) "MENC Position Statement on Early Childhood Education" 注30の書. pp. 71-72.  
なお、第5回、第6回 ISME 幼児部会セミナーにおけるの発表論文からの引用は、セミナー論文集（セミナー参加者に配付）に拠る。